

表はせる丈けの語と認むべきに非るか、換言すれば此の字は或る語の頭音を寫したるには非ずして、一語の全體を寫したるものには非るかとの疑これなり。

三は $\text{𐰽}$ の外に $\text{𐰾}$ の音を寫すに用ひられたるべきことこれなり、而して此の考は遼史耶律大石傳の $\text{𐰽}$ 而畢(今本)同史統和紀の迪离畢は元朝祕史の朶兒邊、元史の朶魯班なるべく而してこれ等はやがてエニセイ碑文中 *Türk-Turan* 碑中に見ゆる *tülbäri* (Radloff. *Altürkischen Inschriften der Mongolei*, I, 306) なるべしとの推察に基けるものなり。尤も大石傳に見ゆる此の $\text{𐰽}$ 字が $\text{𐰽}$ の誤なるべしとの考に於て略ぼ學士の說に従はんとするを以てこゝには $\text{𐰽}$ に $\text{𐰾}$ の音ありしなるべきを推斷せんとするものなり、若しこゝに見ゆる $\text{𐰽}$ が誤りにあらずとの考を得ることあらば、此の結果を以て黑韃事略の「都由糾切」の記事に及ぼし得るに於て、極めて興味ある問題なるを思ふ、たゞ此の $\text{𐰽}$ ( $\text{𐰽}$ ) 而畢は *tülbäri* なるべしとの考は今日尙ほ深く研究を試みたる所にあらざるは、特に茲に斷り置かざる可らざるなり。

(史學雜誌 第二十七編第一號、大正五年一月)

## 西遼事蹟の故末文の其の半條